

《博士論文要旨および審査報告》

井黒佳穂子 テキストとイメージから  
追う物語性の構築

——絵巻から浮世絵まで——

——学位請求論文——

I 論文要旨

井黒佳穂子

私たちが幼い頃から慣れ親んできた「物語」は、どのような形で享受されてきたのだろうか。本論文ではいわゆる平安時代に隆盛した「物語文学」に限定しない、「筋によってまとめられる統一性を持った言説」を、「物語」として採り上げながら検証していく。

「物語」を表現するものは、必ずしも「ことば」だけとは限らない。私たちが「物語」を楽しむ時、しばしば「絵」を介在する。「絵」は「ことば」と並んで、「物語」を表現するメディアとして人々に鑑賞されてきたのである。

物語や説話を「詞書き」と「絵」によって叙述し、巻物装に仕立てたものを「絵巻物」と称する。絵巻物の制作が盛んになるのは十一世紀頃といわれ、数多くの物語絵巻や説話絵巻が作られた。絵巻物は室町時代から江戸前期にかけて成立した御伽草子に至るまで、五百年の長きに亘り「物語」の代表的な形態の一つとなる。

しかし、絵巻物にはどうして「絵」が描かれるのだろうか。「物語」に絵があることで何が変わるのか、あるいは全く変わらないのだろうか。

第一章では御伽草子から『木幡狐』と『七夕さうし』を採り上げ、それぞれに伝本の比較を行い、「詞書き」と「絵」がどのような関係性にあるのか、表現の変化が「物語」の内容に及ぼす影響について考察した。「物語」において、テキストは「物語」の始めから終わりまでを叙述するが、絵は「物語」の筋を断面的に描出しているに過ぎない。しかし、絵は単独でも「物語」を生み出しうる可能性を秘めており、御伽草子が伝本によって、これほど内容を変えてしまうのは、「絵」があったからだともいえる。そして「テキスト」と「絵」の重層的な堆積

こそが、「物語」の幅を押し広げていたのであった。

第二章では『小柴垣草紙』を題材に、「詞書き」と「絵」における身体表現を通じて、「物語」が長編化するに従って、制作動機が事件の叙述から、絵を見せることへ推移している点を明らかにする。『小柴垣草紙』における、〈短文系統〉から〈長文系統〉への流れは、実際に起こった事件を記録しようという説話絵巻から、微笑ましい「艶笑譚」としての御伽草子絵巻への変化であった。『小柴垣草紙』の長編化を促したのは、「身体」の描写方法であり、「絵」が本来の筋を変えてしまうほど、「物語」において大きな力を持っていたことを示唆している。

第三章では専修大学図書館蔵『源氏物語画帖』の翻刻を行い、江戸前期の源氏物語が「絵」によって大衆化していく様相を、従来の「源氏絵」と近世絵入版本との比較から照射する。専大本を通じて認められる源氏物語の価値は、公家の文化的優位性や、誹諧師の句作に必要な知識を記したものではなく、源氏物語を所有するという「ステイタス」そのものであり、美しい文字と華やかな色彩を纏わせることによって可視化させた、「豪華さ」にあったと思われる。公家にとっても源氏物語を揮毫することは、自らの矜持を誇示する以上に、生業の一つとなっていたのだろう。「源氏絵」の伝統を踏まえつつ、独自に解釈を加えた『十帖源氏』が描かれ、さらにこのような挿絵を下敷きに、極彩色の豪華な画帖が制作されるという階梯は、江戸前期の新興層における、源氏物語享受の様相を克明に映し出している。同時に「物語」が大衆化を指向する時、「絵」がいかに大きな役割を果たしてきたかについての証左でもあった。「絵」は視覚表象に限定されるが故に、より直裁的に人間の欲求を反映させるだけの訴求力を有していたといえよう。

第四章では芳年『月百姿』の主題について検討しながら、絵が「ことば」の力を借りることで詩情を獲得し、大衆絵画である浮世絵がどのような情趣を表現したかについて論じる。『月百姿』に現れた「詩情」は、「絵」と「ことば」の性質をよく理解し、巧みに使い分けることで獲得したものであった。削り取られた情報から、自在に題材を想起することができたのは、江戸時代を通じて、さまざまなテキストや絵画が享受されており、大衆の中で、題材に通暁するだけの土壌が、充分に育っていたことを意味する。『月百姿』は、これまで「物語」が「絵」によって大衆化を目指してきた関係性を、逆転現象させたものであったのだ。

本論文は、絵入り「物語」を題材に、「詞書き」と「絵」について比較調査し

ながら、「物語」における「テキスト」と「イメージ」の関係を考究するものである。「物語」は読み継がれるほど解釈の幅を広げたが、「テキスト」や「絵」もまた書き写され、描かれるにつれて、新たな表現を創出していった。「物語」における「テキスト」と「イメージ」の関係は、異なる媒体として重層的に重なり合いながら、互いに「物語」の解釈を押し広げていくことで、次の「物語」を紡ぎ出す源泉となっていくのである。

## Ⅱ 審査報告

- (主査) 専修大学文学部 教授 石黒吉次郎  
 (副査) 専修大学文学部 教授 板坂 則子  
 (副査) 慶應義塾大学文学部 教授 石川 透

本論文は御伽草子の絵の研究を始発とし、近世作の古典文学の画帖、さらには物語的ないし説話的題材の浮世絵の研究に及ぶもので、題目のとおり、絵画史的・美術史的な研究ではなく、これらの絵を物語等の文学とのかかわりにおいて調査し、論じたものである。いわば日本文学研究の立場からの絵画研究ということになり、こうしたアプローチは近年盛んになりつつあるものでもある。具体的には御伽草子「木幡狐」「七夕のさうし」を取り上げ、ついで絵巻「小柴垣草紙」を、次に専修大学図書館蔵「源氏物語画帖」を、さらに月岡芳年の浮世絵「月百姿」を論じている。

最初の「木幡狐」の研究においては、狐の物語の歴史から本作品の分析へと移るが、研究史をよく踏まえ、独自に諸伝本を調査したことが業績の第一である。諸本を絵のみならず本文をも比較した結果、ローマ本・岡見本・くもん本が近い関係にあり、黒川本・徳江本が近い関係にあるなどの結論を導いており、「木幡狐」研究では現在もっとも進んだ成果の一つを示しているといえるであろう。なお岩瀬文庫蔵の「狐草紙」の絵に、髪の毛を頭に載せた狐が描かれているが、これについて天理本『狂言六義』所収の「釣狐」、洒落本「きつねのも」等を引用

し、狐の変化においては藻を使用することがあるという伝承がこの絵に反映していることを明らかにしていることなどが注目される。

「七夕のさうし」は専修大学図書館も一本を所蔵しているが、これの作品研究においても同様の研究方法を取っており、諸本を調査し、絵巻系と冊子系を比較した上で、三つの場面に注目し、テキストと絵がお互いに影響し合っどどのように変化したかを詳しく論じている。

こうした研究方向はさらに「小柴垣草紙」論にも受け継がれている。この絵巻は齋宮と武士との密通事件に取材したポルノグラフィーとして有名なもので、そのために従来あまり公には研究されてこなかった傾向があるが、これについても伝本十五種を調査し、その特徴を述べるとともに二系統に分類し、一方を短文系統、他方を長文系統とし、さらに系統不明本を一種あげる。そして短文系統から長文系統に発達したと結論するなどの成果を得ている。この論も「小柴垣草紙」の研究に新たな局面をもたらすものである。

江戸時代の「源氏物語画帖」については最近研究が進んでいるが、専修大学蔵の「源氏物語画帖」については従来あまり検討されてこなかった作品で、井黒氏が研究のメスを入れた形となっている。これについても氏は「源氏物語扇面図屏風」等九種の源氏絵をあげて、専大本との比較を試みているが、ここでの論の特色は野々口立圃の『十帖源氏』に見られる挿絵との類似性を指摘したことにある。氏はさらに上方板『おさな源氏』、松会板『おさな源氏』、鶴屋板『源氏小鏡』の挿絵も視野に入れて検討しているが、堂上の文化である「源氏物語画帖」を一般に流布した源氏物語梗概書の挿絵と比較していることがこの種の研究の新しい方向性を示すものであろう。

「月百姿」は月にまつわる故事や物語を百枚の浮世絵にしたものである。氏はまずこの作品には俳諧趣味があることを指摘する。次に「月百姿」が成立してゆく様相を明らかにしている。そして「嫦娥奔月」「つきのかつら 呉剛」「月宮迎竹とり」などの絵を取り上げ、江戸時代におけるこの種の故事・物語の受容の相などに関連づけて考察している。

本論文は研究史が十分にまとめられ、その上で資料を博搜して論を構築しており、この論は氏のたいへんな労作といえる。まだ研究史の浅い作品もあって、それに果敢に挑戦し、成果をあげていることは評価できる。一面まだ考察が不足であり、論として熟していないかと思われる点があって、それは今後の課題として

残るであろう。調査のために多くの労力を費やし、地道に取り組んだ研究態度も評価すべきと思われる。従来の研究水準に鑑み、この論がその上にいくつかの新しい局面を切り開いていることをもって、博士の学位を授与するのにふさわしいと判定する。

### Ⅲ 学位授与要記

- |            |                                  |           |          |
|------------|----------------------------------|-----------|----------|
| 一、氏名・本籍    | 井黒 佳穂子（宮崎県）                      |           |          |
| 二、学位の種類    | 博士（文学）                           |           |          |
| 三、学位記番号    | 博文甲第五十二号                         |           |          |
| 四、学位授与の条件  | 学位規則第四条第一項該当                     |           |          |
| 五、学位授与の年月日 | 平成二十五年三月二十二日                     |           |          |
| 六、学位論文題目   | テキストとイメージから追う物語性の構築——絵巻から浮世絵まで—— |           |          |
| 七、審査委員     | 主査                               | 専修大学文学部   | 教授 石黒吉次郎 |
|            | 副査                               | 専修大学文学部   | 教授 板坂 則子 |
|            | 副査                               | 慶應義塾大学文学部 | 教授 石川 透  |